

白山ふるさと文学賞

第三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

私の母

松任中学校三年

中村 なかむら

望美 のぞみ

私の母はいつまでも挑戦するのをやめない人だ。

今年、母はある資格をとるために放送大学というところに入った。母の話によると七十代のおばちゃんも資格をとるために元気に勉強しているらしい。母は「私も負けてられないぞ！」とはりきっていたが、もう数年すれば五十歳になる中、資格をとろうと大学に入る母も私からすれば十分すごいと思う。数年前の私や母、家族からすれば全く考えられないことだ。

六年前、母は専業主婦をやめて中学校の支援員となった。支援員とは障害をもった子や授業についていけない子の手助けをする仕事だ。当時、私は母はそんなに長く続かないだろうと思っていた。実際、慣れない仕事ばかりで腰を痛めていた。しかし、一年、二年…と経つと母はそんなことなど気にならない様子だった。むしろ、「仕事を始めてから充実感がある。」と言うようになった。そして、ここ一、二年でもっと仕事について勉強したい、とまで言い始めた。父はこれには驚いたようだったが「別にそこまでしなくてもいいだろう。」と反対した。私も、「今からじゃもう遅いし、しなくてもいいんじゃないかな。」と思っていたし、母はおとなしめな性格なのでこれで引っこむだろう、と思っていた。しかし、それでも母はやりたいと言い、最終的には、父を説得した。母は、私に、「のぞみちゃんは受験生やけど、お母さんも受験生になるからね。」と言った。

そして母は放送大学に入学し、勉強しはじめた。仕事があり家事もありとても忙しそうだったけれど、それらの合間を見つけては勉強していた。最初は家事や仕事との両立なんてできるのだろうか、と心配したが全て無事にできていた。私も積極的に家事を手伝うようになった。そんな時、母の試験の一ヶ月前から妹が入院することになった。そのことで家中は大騒ぎ。結構大きい手術をするので三週間ほどは入院するといふ。また最初の一週間は親も一緒に病院に泊まるのが良いという。父はその時期忙しいので母が泊まることになった。母は仕事と家事と勉強の

三つに加え、妹の入院の準備や手続きで忙しくなった。もちろん父と交代でやっていた部分もあったが、疲れがたまり体調をくずすことも少なくなかった。そして、ついに入院当日、父も手伝い初日は何も起こらずに終わった。しかし、三日目ぐらいで、私が体調をくずしてしまった。私の看病と妹の入院生活の世話が重なり、母と父は大変だったと思う。そんなこともありながら手術も成功し入院して一週間、大分落ち着き、私の体調も大分よくなった。しかし、毎日、母は父と交代で妹の様子を見に病院へ行ったため、落ち着いたとはいえ大変だった。それでも夜、母が勉強する姿を毎日、見た。私は母に、なぜそこまでするか尋ねてみた。すると母は、「働き始めた頃は何も知らなくて毎日が不安だったな、もっと勉強していればあの頃も、もっと何か違っていたと思うからかな。」と言った。私はこれを聞いて、私ももっと勉強がんばらなきゃいけない、と思った。

そしてついに試験当日、母は特に緊張した様子は見られなかったが帰ってくるのと疲れていた。しかし手応えはまあまあ良いという。まだ合格かは分からないが、ぜひ母に合格してほしい。

また、母はこの秋と冬にもう二つの分野について勉強するつもりだという。母の学ぼうとする姿勢に尊敬するばかりだ。

私も母のように、いくつになっても挑戦するのをやめない人になりたい。